

商大、オンライン授業軸

後期方針案「ゼミなど」対面も

小樽商科大は9月28日から始まる本年度後期の授業実施方針案を固めた。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、学内での授業を休止してオンラインで行った前期の形式を基本的に継続する一方、少人数で行えるゼミや学外講師による一部科目は対面授業を行えるように緩和する。

同大は方針案策定の前提として、7月下旬に学生らに行ったアンケート結果で「通学を極力避けた授業運営を望む声が多い半面、キャンパス開放や対面授業を望む声があった」として、対面と遠隔の「ハイブリッド型」授業を取り入れる必要性を示した。

その上で、対面授業を行う際には教室内の人数を定員の3分の1とすることや室内の消毒、感染者が出た場合の接触者把握のための

出席管理などが必要と判断。ただ、それでも空き時間や通学時の学生の行動の規制は困難として、学内に集まる学生が大量になると「感染の可能性が高まって

しまう」としている。

方針案はこれらを踏まえ、前期に続きオンライン授業を基本とし、対面授業を再開する科目も、学内で感染者が出た場合などはオンラインに切り替えるとした。方針案は同大が今月7日にホームページで公表。今月中に正式決定する。

（前野貴大）

「はしけ」撤去 惜しむ声

運河で作業開始

小樽市内に現存する「はしけ」の最後の1隻の撤去作業が17日、小樽運河の北運河地区で始まった。建造から半世紀が過ぎて老朽化が著しく、市が維持管理は困難と判断していた。作業は約2週間で終える見込みで、今月中にも完全に姿を消す運河のシンボルに、市民からは惜しむ声が上がっている。（谷本雄也）



撤去作業が始まった小樽に現存する最後のはしけ

有志がお別れ会 潮太鼓打演

最後のはしけは1969年建造の鋼製で全長24.4m、幅8.4m。89年に市内の郵船海陸運輸（現ノーススタートランスポート）が市に寄贈し、市が小樽運河の原風景が残る北運河地区に浮かべて展示していた。ただ、ここ数年は、はしけの継ぎ目や穴から浸水し一部が水没するなど老朽化が進み、改修も難しくなっていた。

17日の撤去作業では、はしけをロープで引っ張って対岸まで移動させた後、作業員が甲板の木材などを取り除いた。作業は2週間ほどで終える予定。撤去の様子を見守った小樽商科大の高野宏康客員研究員は「運河の象徴だったので非常に残念。市民の関心も高まり、手遅れにならないうちに対策を行うべきだった」と話した。

15日には撤去作業に先立ち、市民有志が小樽運河でお別れ会を開いた。おたる潮まつりの海上パレード「潮わたリ」で、はしけが94年まで使われていた縁から、まつり実行委やおたる潮太鼓保存会のメンバーら約50人が参加。神事や保存会による打演などが行われ、はしけとの別れを惜しんだ。



はしけ 港内に停泊する船と岸壁の間を別の船で引き、貨物や旅客を載せて行き来した白船。小樽運河ははしけを泊める場所として造られ、1924年（大正13年）ごろは595隻が運河内を往来したとする記録が残る。その後、船が直接接岸できる埠頭（ふ頭）などが整備され、小樽のはしけは激減。50年代に100隻を下回り、89年には業務で使われなくなった。